

鯨 研 通 信

第 376 号

1989 年 7 月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104 東京都中央区豊海町 4 番 18 号 東京水産ビル 電話 03 (536) 6521 (代表)



鯨 の 墓

遠洋水産研究所 奈 須 敬 二

私の手許に、古ぼけたガリ版刷りの「二極タイムス」と表題を書いた綴込みがある。

その「二極タイムス」とは、日本を離れて4ヶ月有余にわたり鯨を追う北洋の捕鯨船団で、毎日発行された船内新聞のことである。

「二極」とは、私が乗船した捕鯨母船が、第二極洋丸という船名だったからである。

また、北洋とは地理的にはほぼ北海道とアメリカのシアトルを結んだ線から北の海を指している。

その時、筆者は水産庁の首席監督官といういかめしい肩書きを拝命して、北洋の捕鯨母船に乗り込んだ。昭和41年初夏のことである。

横浜の大栈橋を後にして北東へ進路をとると、1週間もしないうちに北洋の鯨漁場にやってくる。

初夏とはいってもそこは北の海である。来る日も来る日も、頭の上のしかかる厚い雲と限りなく続く灰色の海を眺めての生活は、陸の上と完全に庶断された船の中の社会で、文字通り「格子なき牢獄」である。

そのような海の上での楽しみの一つは、僅かにワラ半紙1枚ではあるけれども、内地のニュースを伝える「二極タイムス」であった。

私はその船内新聞に、一日も欠かすことなく2ヶ月にわたり、「鯨の話」を連載した。

その中に「鯨の墓」があった。「鯨の墓」については、古文書などにも散見されていて、古くから記録が残されている。

近年に至っては、元神戸医師会長故進藤直作博士、東京水産大学名誉教授故吉原友吉博士そして遠洋水産研究所長大隅清治博士らの報告が、主な文献としてあげられる。

一方、筆者は本鯨研通信 375 号に「昭島くじらまつ

り」を執筆したが、次に、かねて「鯨の墓」について集めていた資料の整理を思い立ち、その結果をここに寄稿した次第である。

本報文に出てくる「鯨の墓」は、象などのような自然の墓ではなくて、人間が建立したものである。

その鯨の墓は古いものでは、三重県熊野市の二木島に、寛文11年(1671年)3月に建立した「鯨三十三本供養塔」がある。

この地でも古くから捕鯨は行なわれていたが、また漁業も盛んであった。そして、熊野地方では、ブリ、マグロなどが33尾漁獲する毎に「万の頭」と称して、餅を撒く習慣があったといわれている。

このようなことから鯨の供養塔も、三十三頭と関係があるのではないかと考えられる。

なお、長崎県北松浦郡大島村に、元禄5年(1692年)に建立された鯨供養碑にも「鯨鯢三十三死生」と刻まれていて、三十三の数字をみることができる。

鯨の墓で代表的なものは、山口県長門市青海島の通であろう。

通の捕鯨は寛文12年(1672年)というから、計らずも二木島に「鯨三十三本供養塔」が建立された翌年に始まったことになる。

始めは突組と呼ばれる、極めて原始的な方法で鯨を捕っていたが、延宝3年(1675年)に和歌山県太地浦で考案された、画期的な網で鯨を捕る方法が、この地に延宝5年(1677年)導入された。

その斬新な網取式捕鯨により、どれ程の鯨が獲れたのか、資料のない現在では知る術もないけれども、恐らくは従来の突組時代に比較すると、倍増したのではないかと考えられる。何となればかつての歴史書は、

「鯨漁は盛大に赴けるもの」と伝えている。

一方、鯨捕り達は、あの巨体の断末魔のあがき、そして、また捕われた子鯨の傍を去るに忍び難く留まっ
ていて、遂に捕らえられる母鯨には、同情の念を禁じ
止なかったことを慄述したといわれている。

そして「板子一枚下は地獄」ともいわれるように、
危険と同居していた漁師の生活から生まれた篤い信仰
心が、鯨の供養心を呼び起したのであろう。

延宝7年(1679年)、浄土宗の向岸寺第五世の心蓮
社讃誉和尚が、鯨善提のために観音堂を建立し、捕獲
した日を命日として鯨一頭毎に戒名をつけ、鯨の靈に
「南無阿弥陀仏」を唱えて死鯨の冥福を祈る、いわゆ
る回向をたむけた。

戒名は仏教徒の名前として死者に贈られる名前であ
る。さらに、南無とは帰依信仰をする意味で、阿弥陀
仏とは阿弥陀如来を意味し、仏教の深遠なる教理を説
いた捷の中では、もっとも多く説かれる仏で、鯨が仏
教徒としての扱いを受けていたことが明らかである。

また、捕獲した場所と年月日、鯨の種類、体長およ
び売れた値段を記した一頭毎の過去帳が、文化(1800
年初め)以降に捕獲された、約1000頭について残され
ている。

戒名をみると

宝誉鯨池
正誉鯨覚
観誉鯨音

などがあり、これらの戒名に共通している誉は、浄
土宗個有の僧侶の号である。

さらに、鯨を解体して胎児が出て来ると、一体つつ
丁寧に埋葬し、供物をして読経念仏した。そして、元
禄5年(1692年)から明治元年(1868)までの約180
年に出て来た、約75体の胎児を埋めた台上に墓を建立
し、その墓碑には、

南無阿弥陀仏 業尽有情 雖放不生
故宿人天 同証仏果

と刻まれており、読み方は、

南無阿弥陀仏
業尽きたり有情 放つと雖も生きず
故に人天に宿って 同じく仏里を証せよ

その意味は、

鯨としての生命は母鯨と共に終り、われらの手に
捕えられたが、本来のわれわれの目的はお前たち胎
児を捕ることではない。むしろ海中へ逃してやりた
いのだ。しかし、お前を独り海へ放ってやっても生
き得ないのだ。どうぞ憐れな子等よ、われわれ人間
と共に、人間世界の慣習によって、念仏回向の功德

を受け諸行無常の諦観というか、悟りを得てくれよ
お願いする。

と史書は伝えている。

讃誉和尚は、さらに漁に携わる村人にも念仏をすす
め、毎年住僧により鯨への慰霊法要が行なわれるよう
になった。

なお、観音堂は後に「清月庵」と改称された。

この他にも胎児の埋葬例はある。

例えば長崎では鯨を解体して出て来た胎児を、鯨に
銚を刺す羽刺の羽織で包み、また四国の室戸では人間
の子供の着物を着せて埋葬した。

さらに、福本和男氏によれば、四国では洗米と清酒
を供え、埋葬して7日間は発掘防止のために番人を置
いたという。

また、徳川時代に紀州から来て鯨漁を始めたといわ
れる醍醐新兵衛が興した、安房勝山(千葉県安房郡鋸
南町大字勝山)には、解剖して出て来た胎児を哀れ
み、新兵衛夫人が建立したという鯨塚がある。

このようにして、わが国に昔あった鯨の胎児を手篤
く埋葬して弔う慣習は、鯨捕り達の鯨への愛情表現以
外の何物でもなかったことが理解される。

次に、このような話もある。

丹後の伊根(現在の京府府与謝郡伊根町)では、何
時の頃から捕鯨が行なわれるようになったか定かでは
ないけれども、捕鯨の盛期を迎えたのは徳川初期と考
えられている。

ここでは、「母鯨を捕獲したところ、仔鯨が母鯨の
死を知る由もなくまわりつき、一向に離れようとし
ない様子は、乳を飲む様にも似ていた。その執拗な仔
鯨を何回となく追い払うことを試みたが、遂に離れる
ことなく母親ともども捕獲された。

しかし、余りにも親鯨を慕う仔鯨の行動に絆され
て、その肉を食べるに忍びなく、その仔鯨を葬り墓を
建立して供養した」と伊根浦の漁業史は伝えている。

そして、伊根町には「児鯨塔(仔鯨の墓)」「在胎鯨
子塔(胎児の墓)」さらに「鯨胎凶霊追薦(死体とな
った胎児の冥福を祈るための追善)」の三基の墓が建
立された。

このように、昔捕鯨が行なわれていた地方には、数
多くの鯨の墓が建立されているが、捕鯨が行なわれて
いなかった地方にも、鯨の墓や塚は珍らしくない。

例えば、愛媛県明浜町高山では、天保8年(1837年)
に鯨が漂着し、臨濟宗妙心寿派妙高山金剛寺で葬式が
行なわれ、鯨塚が建立されたが、戒名は

「鱗王院殿法界全畏大居士」

と刻まれている。

その戒名にみられる「院殿大居士」は最高の称号で、昔は大名などに贈られている。そして、故進藤直作博士は、昔は播州赤穂城主浅野内匠頭長矩（冷光院殿吹毛玄利大居士）、現代では元内閣総理大臣故池田勇人（大智院殿殿誉俊道勇人大居士）の戒務にあることを述べている。このように、鯨の仏に対して人間社会における最大の弔意がなされていたことを知る人は、少ないのではなからうか。

また、宮崎県にも漂着した鯨の塚がある。私事で恐縮であるが、宮崎県は筆者の生まれ故郷である。そして、兄が17年前に送ってくれた、昭和47年1月15日付の宮崎日日新聞に掲載された「鯨魂碑」の切り抜きが、資料を整理している時、全く偶然にも出て来た。これも、何かの因縁であろう、そのあらましを紹介しておく。

場所は日南市油津の漁村に、一頭の鯨が打ち揚げられた。その年は、何百年に一度という大飢饉で農作物は大不作、それに追い打ちをかけるようにしてつづいた時化に、漁村はさびれ、このままでは「飢えて死ぬのを待つばかり」というあせりもみえ始めていた。そこに起った鯨騒動は、村人にとり正に「天佑神助」、今もその伝説が残っている。

「わしの父親が子供のときじゃから嘉永年間（1850年頃）の話じゃな。なーに、伝説なんかじゃありませんよ。浜に打ち揚った鯨を、父親ははっきり見とるとじゃもん」と話す古老。

その話を裏付けるように「昔の人に聞いた話だが、鯨を解体するにはしごをかけて背中に登ったといいますよ」という話。

さらに、巨大な鯨は多くの飢に苦しむ村人を救い、肉は二貫匁（7.5キロ）づつ分けられたという話も残っている。

しかし、解体に夢中になっていた漁師達も、その鯨が身籠っていることを知った時には、無気味な予感に襲われた。そこで、「供養してやらにゃ、たたりで不漁が続くことになっど」ということで、胎児を近くの寺の境内に埋葬して、供養と感謝の念から石碑が建立された。以来100年近くの間、戦前までは線香の煙は絶えなかったといわれている。

さらに、油津地区の漁民達は、毎年盆の頃に「くじら餅」を作って贈り合い、鯨へ感謝する風習が、今でも残っていることを、故吉原友吉博士は述べているが、筆者はまだその「くじら餅」をみたことがない。

このような鯨への感謝の念から建立された墓は、大分県の臼杵にもある。

すなわち臼杵の大泊という漁村では明治元年（1868

年）の頃、港の修築工事をした。ところが、工事費が巨額に上って、村ではその経費捻出に苦慮していた。

そこへ、明治3年2月1日に港の中へ鯨が来遊し、村中総出でその鯨を捕えた。

記録によれば、その鯨はナガスクジラで、体長は17間3尺、というから30メートル以上となる。もっとも、その頃の鯨の体長測定方法は、現在のように頭の先から尾羽迄の直線距離ではなく、鯨体に沿って測定していた。従って、同じ鯨でもその体長は昔の方が現在より大きく出ている。しかし、30メートルとはその測定方法を考慮しても大きすぎる。ただし、昔はシロナガスクジラを長須鯨そしてナガスクジラを野曾鯨と呼んでいた。したがって、シロナガスクジラとすれば、鯨体に沿った30メートルという体長はあり得ることである。ただし、当時臼杵近海にシロナガスクジラが回遊していたかどうか、筆者は知らない。

鯨種の詮索は扱っておいて、何れにしても、大きい鯨であったことは間違いない。

そして、その鯨売却代金で港の修築費用は全額支払うことができた。

そこで村人は、鯨への感謝と供養から2月16日に盛大な施錢鬼、つまり無縁仏の霊を弔って行なう読経と百万遍、つまり限りない念仏を唱え、一周忌には「大鯨魚宝塔」と刻まれた鯨塚が建立された。

その鯨塚建立の経緯は

大波戸の元 山付の所へ 大泊村益々繁栄の大吉方に 場所柄によって此所へ 大鯨魚の両眼、陰根、両腰のひれの骨 石のところをつばに入れて 相納める

と「大泊村庄屋文書」は書き残している。

さらに、昭和44年2月1日には、臼杵市大泊区民百余名が公民館に集まり、塔卒婆が立てられ、百回忌の供養がなされたことを、故進藤直作博士は述べている。

いづれにしても、人間も及ばない百回忌の法要が、鯨についていとなまれたとは驚くべきことで、昔からの日本人の鯨に対する愛情の深さを如実に物語っている。

鯨塚は東京の品川にもある。ということは、東京湾奥にまで鯨が来遊していたことが明らかである。もっとも、小型の鯨であるスナメリが東京湾に分布しているという報告は知られている。しかし、この鯨塚は大型の鯨である。

すなわち、寛成10年（1798年）4月30日の台風の後、品川の沖へ鯨が来遊した。翌日、その鯨を発見した漁師達は、沖の方へ網を入れて鯨の逃げ道を庶断

し、舟を並べて追い立てた。そこで、天王州（現在の天王町）へ逃げ込んだ鯨は、容易に捕獲された。

当時の記録としては、それ迄に江戸では鯨が来遊又は漂着したことはなかった。ということで、鯨の一件を先づ奉行所へ届け出たところ、時の七十一代將軍徳川家斉侯の上覧に供することになった。

その後は鯨を品川の海へ移して、町民の見世物とした。ところが見物客が殺到し、当初24文であった鯨までの舟賃が、後には百文にまではね上がったと、いわれている。

そして、

品川の沖にとまりしせみ鯨

みなみんみんと飛んでくるなり

という狂歌まで生まれて、江戸は鯨騒動に湧いた。

その骨の一部を「鯨一頭捕えれば、七つの郷が潤う」とい謔に因んで祭ったのが、品川駅の近くにある利田神社境内の鯨塚である。

ところで、その鯨は体長九間一尺、高さ六尺というから、体長は約16メートルとなる。しかし、当時の体長は、先述したように鯨体に沿って測定していたものと考えられるので、現在の測定法にもとづく体長は15メートル程度とみて差し支えない。とすれば、セミクジラの体高は体長の17パーセント前後であることから、当時の計測が正しいとすれば、体高は2.6メートル位でなければならぬ。ところが、品川の鯨は1.8メートルである。したがって、狂歌に出てくるセミクジラは間違いではないかと考えられる。当時、鯨の大將はセミクジラであったので、或は無造作にセミクジラを狂歌にとりあげたのではなかろうかと、筆者は想像もしてみるのである。

鯨の供養は、何と云っても「万物に霊がある」ことに端を発しているものと考えられ、死鯨の祭りをもっとも恐れたことに他ならないことは、明らかである。そして、そのような鯨の崇りの話は、捕鯨が行なわれた各地に伝えられている。

ここで山口県は大津郡の例を、大津郡史から引用して書かれた「長州捕鯨考」にみられる部分を紹介しておこう。

その昔、殿村某という、この地方きっての素封家、つまり大金持がいた。早くから鯨組にも関係していて、その繁栄振りは村人の羨望となる程の大富豪であった。ところが或る年のこと漁鯨は不漁を極め、重なる出資で心痛していた或る夜のことである。

夢の中に鯨が現われていうには

「明日この沖を子鯨を連れて通るが、どうかこの度だけは襲われないようにして欲しい。その代りに掃途に

はこの沖を通して必ず夫婦がお前様の網にかかって果てるであろうから」

と哀れを催して頼むのであった。

果して、翌日彼の網代を夢の中に現われた通り、夫婦鯨が子鯨を連れて泳いでいるのを見受けた。殿村某は、永い間の不漁にたえかねて、この鯨の願いをきき入れる余裕の持ち合せがなかった。

そして殿村某は、折からの不漁続きで夢中のうちに、漁夫達に命じて親子鯨ともどもに捕獲した。

浦は久方振りの大漁に賑わい、人々は鯨歌がどよめく中で、威勢よく鯨の処理に当たった。ところが、それからやがて殿村某の仕事は総て不思議にも失敗が多く、家産も傾き、人々の羨望の的であった幸福な生活も次第にむしばまれていった。家運も全く衰え、事業の継続は勿論のこと、その日の生活にも事欠く有様となり、遂には落ちぶれて浦を出て行った。

今では、その家系もなく、その家敷の跡さえ知る人もないという。この浦の人達は、これこそ鯨の霊の崇りと、その執念の怖しさをふるえながら伝えている。

一方、このような話とは全く逆の話を「鯨の熊野詣由来記」にみることができる。

昔、太地浦（和歌山県東牟婁郡太地町）に代々鯨捕りを家業としていた、この浦では一番の腕前をもった佐吉という漁師がいた。

その佐吉は或る夜寝ていると、何処からか「佐吉さん 佐吉さん」と呼ぶ不思議な美しい声で目を覚ました。すると枕元に大きい鯨が座っている。驚いた佐吉は、ふるえ声で鯨に「いったいどうしたのか」と尋ねた。

すると鯨は、やさしい目をさらにやさしくして、今にも泣きそうにして「実は、願いがあって参りました。佐吉さん、明日この沖を私が仔鯨を連れて、熊野権現様へお参りにまいりますから、どうぞ見逃してやって下さい。御恩は決して忘れません」と言い終るか終らないうちに、鯨は姿を消してしまった。

やがて夜がすっかり明けて来ると、はるか沖の方を仔鯨を連れて鯨がゆっくりと泳いでいた。

その鯨を発見した浦の人々は、鯨を捕るべく舟を出そうとあせっていた。その時、佐吉はじっと沖を眺めていたが、昨夜の出来事を思い浮べて鯨を捕ることをあきらめ、家路をたどった。

そして、翌年の同じ日にやって来た鯨の大群を佐吉は捕らえて、都に運びびく程の大金持になった。

浦の人々は、いまま佐吉のことを語り伝えて、鯨と熊野権現様の御利益の大きさを、改めて思い知ったという話である。

話が脇道に逸れたけれども、日本全国には鯨の墓が知られているだけでも、50基以上は数えるであろうと故吉原友吉博士は述べている。

いづれにしても、鯨の霊の崇りへの恐怖心そして鯨が絶命する瞬間に、気の荒い鯨捕り達が異口同音に唱えたという「南無阿弥陀仏」と、さらに鯨を捕らえる瞬間の親仔の哀れさに絆された仏心から生まれたものであろう。

なお、鯨の供養は現代社会にもれっきとして受け継がれている。すなわち、筆者もかつて、東京は芝の増上寺で盛大に行なわれた鯨の供養に参列したことがある。

そして、現代における鯨供養は、商業捕鯨が終焉を迎える迄毎年催され、最近では昭和62年に、同じく東京芝の清松寺で行なわれた。

なお、私財を投じて鯨の供養を行なった鯨捕りもいる。

その人は、かつて大洋漁業株式会社の重役であるとともに砲手（銚で鯨を打つ人）であった、泉井守一さんである。

今は伊豆の修善寺で悠々自適の生活を送っている泉井さんは、8,000頭以上を仕止めた、文字通り世界一の鯨捕りで、捕鯨の神様として尊敬されている人である。

その泉井さんは、鯨8,000頭を捕獲した折に、鯨供養のために生まれ故郷である、高知県は室戸市の崎山に建立する菩提寺金剛頂寺に供養塔を建てた。そして梵鐘をも寄進し、盛大な催しをした。

さらに、その寺の境内に筆者の指導で、鯨の標本を陳列した「鯨昌館」を建てた。

筆者はその昔北洋で、泉井さんの捕鯨船に乗る機会を得て、捕鯨の様子を見学したことがある。

その時、早朝シロナガスクジラを発見し、先づ見習砲手が捕鯨砲の引金を引いた。ところが、運悪く銚は鯨の体の表面を掠って、鯨の向う側に落下した。

それからそのシロナガスクジラは極度に用心深くなり（鯨捕り達はコスイといっている）、いわば手負鯨で、鯨への接近が大へん困難となった。そこで砲手が泉井さんに代った。鯨に近づくため捕鯨船のエンジンを或る時は全速力に、又或る時は停止するなど、目まぐるしい操船が続いた。しかし、鯨の逃げ足が巧みで、捕鯨砲を撃つ体勢を作るのに困難を極めた。

そのうちにボーイが朝食を知らせに来た。そして又ボーイが、昼食の準備が出来たことを知らせて来た。勿論食事もそこそこに、乗組員一同目を皿のようにして鯨を探し求める沈黙の時間が続く。

鯨が呼吸のために浮上する方向を予想して走ると、船の後から鯨が浮上する。右へ鯨が浮上することを予想して右へ舵を取ると左へ浮上する。もう鯨との根くらべである。

そして、ボーイが今度は夕食を知らせに来た。鯨を追い始めてから、何時間経ったであろうか。北洋の朝は早いので、もう12時間は経っている。

その時である。泉井さんの手は引金を引き、捕鯨砲から放たれた銚はシロナガスクジラへ命中した。鯨迄の距離は50間（90メートル）以上であったと記憶している。

とくに角、銚に繋がれたロープが、物理学の教科書を見るように、絵のような拋物線を描いていたことを、今でも鮮明に思い出す。船も揺れていれば、鯨も動いている。もう、こうなると本当に名人芸を通り越して神業である。

成程、これが鯨の世界で神様同様に崇められた泉井さんかと、改めて畏敬の念を深くしたものである。

その泉井さんの鯨捕りの血は昔から流れていた。筆者が泉井さん寄進の「鯨昌館」を造るために、室戸に滞在した時のことである。

話は安政5年（1858年）に遡る。2月2日の記録に、「ニノ銚羽指森之丞褒美として銀四十目を授与された」とあることをきいた。

森之丞は元の名を平四郎と呼び、「銚打ちの達人」であった。その平四郎は、鯨方の旦那宮地左仲から、「お前は銚の達人ぢゃから後銚の丞と改めよ」という達しにより、改名したといわれている。（室戸町史より）。

森之丞は、泉井さんの曾祖父に当るという家系図を、泉井さんの兄さんである故泉井安吉さんのお宅で拝見した。さらに、その家系図とともに。

大海原かける鯨の鰭をるも

きみがいつしの功績なるらめ

という和歌が添えてあったを、筆者のメモから知ることができた。

そして「守一さんの「守」は、森之丞に肖ったのです」と、故守吉さんの奥様から伺った。泉井守一さんが世界一の鯨捕りとなったことも宜なる哉。

話が大へん脇道に逸れたけれども、以上述べたように、日本人は人類に貢献した鯨に対して仏教徒として扱い、成仏した鯨への弔は、既述したように人間の仏も及ばない100回忌という法要がなされたこともある。

このような鯨に対する尊敬の念から香華などを捧げる供養こそ、動物愛護の原点ではないかと筆者は考え

るのである。

最後に、戒名および仏事等について種々御教示いた

だいた、東京都昭島市の臨濟宗建長寺派福厳寺住職内田順也先生に深謝の意を表す。

せ た し あ

「くじらの文化人類学——日本の小型沿岸捕鯨」について

最近、捕鯨活動の急速な低下、そして1988年からの商業捕鯨モラトリアムという結果にもかかわらず、鯨、特に捕鯨に関する出版物が数多く世に出されている。出版物だけではなく、鯨に興味をもつ一般の人びとが多くなってきている。そして、その関心のもち方、対象がかなり多岐にわたり、広がっているという傾向が認められる。

1989年5月に出版された「くじらの文化人類学」(海鳴社)も、今までに見られなかった側面から捕鯨を解析している。この本は当研究所と深いかかわりをもっているもので、紹介させていただく。

原本は、SMALLTYPE WHALING IN JAPAN: REPORT OF AN INTERNATIONAL WORKSHOP (Boreal Institute for Northern Studies, The University of Alberta, 1988)であり、これを著者の一人である高橋順一さんほか翻訳したものである。

1987年、カナダのアルバータ大学のMilton M. R. Freeman教授から、日本の小型沿岸捕鯨の歴史、実態を文化人類学的観点から解析し、報告書を作成、IWCに提出するという提案を受けた。Freeman先生は、かねがねIWCの捕鯨規制措置は、一方的に鯨の保護に偏りすぎ、鯨に依存して生きてきた人びとの

立場に眼を向けていない点を批判してこられた。このような立場から、この地方的捕鯨を存続させるために、国際的に説得力をもつ報告を作成すべきであると主張しておられた。この調査には日本からは3名、アメリカから4名、イギリスから2名、カナダ、オーストラリア、ノルウェーから各1名、合計12名の研究者が参加した。

報告の項目を拾うと次のような内容になる：第1章 日本の捕鯨の歴史的発達、第2章 小型沿岸捕鯨とは何か、第3章 捕鯨者の社会人類学、第4章 鯨肉の商業的流通、第5章 鯨肉の儀礼的流通、第6章 房総沖のツチ鯨漁：ケース・スタディ、第7章 食物としての鯨、第8章 鯨と日本人の信仰、第9章 捕鯨文化とモラトリアムの打撃、終章 生存捕鯨問題と日本の小型沿岸捕鯨

英文の原報告は1988年のIWC年次会議に提出され、日本の小型捕鯨を各国の関係者に理解させるに大へん有効であった。捕鯨産業が国際的的支持を受けるためには、資源管理の課題に限定されず、その社会・経済的側面の解析も行われなければなるまい。このようなアプローチは捕鯨だけにとどまらず、漁業一般にも言えることであろう。

翻訳本は海鳴社(東京都千代田区西神田2-4-5)に申し込まれてもよいし、当研究所にも若干の余部があるので申し込まれば、おわけできると思う。定価は1,648円である。(長崎福三)

ストランディング・レコード—13

番号	日付	種類	頭数	場所	報告者	備考
O-51	29/03/88	オオギハクジラ	1	新潟県村上市岩ヶ崎	本間義治 (新潟大学)	体長5.2m
O-52	26/04/88	アカボウクジラ 科の一種	1	新潟県上越市 丹原海岸	本間義治 (新潟大学)	体長 2 m、雌
O-53 * ¹	18/12/88	<i>Mesoplodon</i> sp.	1	新潟県刈羽郡西山町 石地海岸	中村幸弘 (上越市立水族博物館)	体長4.68m、雄
O-54	01/11/87	マイルカ	1	岡山県笠岡市 金浦漁港	惣路紀通 (カプトガニ保護センター)	
O-55 * ²	04/02/85	イシイルカ	1	新潟県柏崎市 松波海岸	中村幸弘 (上越市立水族博物館)	新聞情報(05/02/85)
O-56	04/01/89	イシイルカ	1	新潟市五十嵐海岸	池原宏二 (日本海区水研)	新聞情報(新潟日報 —05/01/89)
O-57	12/01/89	イシイルカ	1	新潟県西蒲原郡巻町 角田浜	池原宏二 (日本海区水研)	体長2.14m、体重152 kg、雄 新聞情報(新潟日報 —19/01/89)
M-17 * ³	03/02/89	ミンククジラ	1	新潟県両津市白瀬沖 (定置網)	池原宏二 (日本海区水研)	新聞情報(新潟日報 —04/02/89)
O-58 * ⁴	30/01/89	イシイルカ	1	秋田市浜田海岸	田郷岡良和 (男鹿水族館)	体長1.83m、雌
O-59	27/01/89	イシイルカ	1	石川県珠洲市 折戸海岸	高門光太郎 (のとじま臨海公園 水族館)	体長2.17m、体重180 kg、雄
O-60	02/02/89	ハナゴンドウ	1	和歌山県那智勝浦町 宇久井沖 (定置網)	柳沢踐夫 (太地町立くじらの 博物館)	新聞情報(南紀州新 聞—03/02/89、和歌 山読売—03/02/89)
O-61	?/02/89	カマイルカ	1	鳥取県東伯郡北条町	田口淳子 (春名動物病院)	新聞情報(日本海新 聞—15/02/89)

〇-62	01/02/89	カマイルカ	1	石川県門前町剣地 琴ヶ浜	高門光太郎 (のとじま臨海公園 水族館)	体長2.04m、雌
〇-63* ⁵	21/02/89	アカボウクジラ	1	神奈川県中郡 二ノ宮町前川海岸	中島 悟 (江ノ島水族館)	体長5.8m、雌
〇-64	06/02/89	ネズミイルカ	1	秋田県能代市落合	杉原 茂 (能代市柳町)	新聞情報(北羽新報 -07/02/89)
〇-65	01/03/89	イシイルカ	1	石川県鹿島郡 能登島町野崎 (定置網)	高門光太郎 (のとじま臨海公園 水族館)	体長2.12m、体重148 kg、雌
〇-66	13/03/89	カマイルカ	1	石川県羽咋郡志賀町 甘田海岸	高門光太郎 (のとじま臨海公園 水族館)	体長1.90m、雌
〇-67	17/03/89	カマイルカ	1	石川県羽咋市 千里浜海岸	高門光太郎 (のとじま臨海公園 水族館)	体長1.79m、雌
〇-68	20/03/89	カマイルカ	1	石川県羽咋郡富来町 七浦海岸	高門光太郎 (のとじま臨海公園 水族館)	体長1.82m、雌
〇-69	30/04/85	スナメリ	1	和歌山県有田市 逢井海岸	江川和文 (東燃総研)	
〇-70	03/01/89	スナメリ	1	和歌山市 名草ノ浜海岸	江川和文 (東燃総研)	
〇-71	10/04/89	ハナゴンドウ	4	和歌山県西牟婁郡 串本町大島榎野前 弁天島 (定置網)	御前 洋 (串本海中公園 センター)	体長雄2.83m、2.59 m、2.80m、雌2.83m 新聞情報(紀州新報 -13/04/89、朝日新 聞-12/04/89)
〇-72	25/02/86	イシイルカ	1	和歌山県西牟婁郡 白浜町白良浜海岸	田名瀬英明 (京大理学部附属 瀬戸臨海実験所)	体長2.36m
〇-73	18/04/89	アカボウクジラ	1	和歌山県田辺市富田	田名瀬英明 (京大理学部附属 瀬戸臨海実験所)	新聞情報(紀伊民報 -20/04/89) 雌(胎児有)

〇-74	29/03/89	イシイルカ	1	北海道木古内町大平	中田 淳 (函館水試)	新聞情報(北海道新聞-03/04/89)
〇-75	27/04/89	マダライルカ	1	神奈川県葉山町 一色海岸	中島 悟 (江ノ島水族館)	雌
〇-76	24/02/89	イシイルカ	1	富山県高岡市太田 松太枝浜	浜岸豊治 (魚津市立 魚津水族館)	体長2.10m、体重143kg、雌(胎児有) 新聞情報(富山新聞-04/03/89)
〇-77* ⁶	07/04/89	<i>Mesoplodon</i> sp.	1	富山県魚津市 魚津補助港蟹江浜	浜岸豊治 (魚津市立 魚津水族館)	体長4.95m、雌 新聞情報(富山新聞-08/04/89)
〇-78	08/05/89	カマイルカ	1	小田原市石橋漁場 (定置網)	中島 悟 (江ノ島水族館)	新聞情報(神奈川新聞-10/05/89)
〇-79	22/04/89	カマイルカ	2	石川県鹿島郡 能登島町鰺目 (定置網)	桶田俊郎 (のとじま臨海公園 水族館)	体長雄 1.54m、雌 1.48m
〇-80	25/04/89	<i>Mesoplodon</i> sp.	1	石川県輪島市大川 大川海岸	桶田俊郎 (のとじま臨海公園 水族館)	新聞情報(中日新聞-26/04/89)
〇-81	29/04/89	<i>Mesoplodon</i> sp.	1	石川県輪島市塚田 塚田海岸	桶田俊郎 (のとじま臨海公園 水族館)	体長2.28m、雌 新聞情報(中日新聞-30/04/89、北国新聞-30/04/89)
〇-82	07/02/89	カマイルカ	1	新潟県柏崎市 中央海岸	箕輪一博 (柏崎市立博物館)	
〇-83	11/03/89	ネズミイルカ	1	新潟県刈羽郡西山町 石地海岸	箕輪一博 (柏崎市立博物館)	
〇-84	27/05/89	アカボウクジラ	1	静岡県小笠郡大須 賀町沖之須海岸	大草忠司 (淡島マリンパーク)	新聞情報(静岡新聞-27/05/89)
M-18	12/06/89	ミンククジラ	1	山口県長門市東深川 只ノ浜海岸	田川章次 臼井俊紀 (下関中央法律事務所)	新聞情報(山口新聞-13/06/89)

○-85	05/04/83	カマイルカ	1	新潟県佐渡郡羽茂町 亀腸沖 (刺網)	野田栄吉 (新潟県栽培漁業 センター)	体長1.85m
○-86	09/01/85	コビレゴンドウ	1	新潟県両津市野浦沖 (刺網)	野田栄吉 (新潟県栽培漁業 センター)	新聞情報(新潟日報 -11/01/85)
○-87	18/02/85	<i>Mesoplodon</i> sp.	1	新潟県両津市北小浦	野田栄吉 (新潟県栽培漁業 センター)	新聞情報(新潟日報 -21/02/85)
M-19	20/09/85	ミンククジラ	1	新潟県両津市羽二生 (定置網)	野田栄吉 (新潟県栽培漁業 センター)	新聞情報(新潟日報 -22/09/85)
○-88	26/01/86	オキゴンドウ	1	新潟県両津市白瀬沖 (定置網)	野田栄吉 (新潟県栽培漁業 センター)	新聞情報(新潟日報 -30/01/86)
○-89	16/02/89	マイルカ	1	新潟県佐渡郡 佐和田町窪田	野田栄吉 (新潟県栽培漁業 センター)	
M-20	02/04/89	ミンククジラ	1	新潟県佐渡郡赤泊村 蓮場	野田栄吉 (新潟県栽培漁業 センター)	
○-90	03/04/89	<i>Mesoplodon</i> sp.	1	新潟県佐渡郡小木町 城山	野田栄吉 (新潟県栽培漁業 センター)	雌(胎児有)
○-91	11/06/89	<i>Mesoplodon</i> sp.	1	新潟県佐渡郡相川町 大浦	野田栄吉 (新潟県栽培漁業 センター)	

- * 1 この情報は国立科学博物館の宮崎信之氏のもとに寄せられ、宮崎氏より日鯨研へ報告されたものです。また、この個体を扱った新潟日報の記事を日本海区水研・池原宏二さん、北国新聞の記事を東京・中野の中村春江さん、朝日新聞の記事を新潟県栽培漁業センターの野田栄吉さんからもお送りいただきました。
- * 2 この情報は国立科学博物館の宮崎信之氏のもとに寄せられ、宮崎氏より日鯨研へ報告されたものです。
- * 3 この個体の情報は新潟県栽培漁業センターの野田栄吉さんからもお教えいただきました。
- * 4 この情報は国立科学博物館の宮崎信之氏のもとに寄せられ、宮崎氏より日鯨研へ報告されたものです。また、この個体を扱った新聞記事を宮城県・牡鹿町の木村宣紀さんからもお送りいただきました。
- * 5 この個体を扱った読売新聞の記事を東京大学・吉岡基さんからもお送りいただきました。
- * 6 この個体を扱った北国新聞の記事をのとじま臨海公園水族館からもお送りいただきました。